

ラヴェル「ボレロ」解説！

作曲家・曲の特徴・リズム・使われる楽器

① 基本情報

- 1928年作曲
- バレエ音楽
- 4分の3拍子
- C-dur 基本はハ長調
- E-dur 終結部でホ長調へ転調し、その後ハ長調に戻る

② 曲のしくみ

- スネアドラムが同じリズムをくり返す
- A・A・B・Bを基本にくり返す
- 曲全体が長いクレッシェンドのようにだんだん強くなる

③ よく出る楽器

- 最初に主題を演奏する楽器：フルート
- よく出る楽器：サクソフォーン、チェレスタ、トロンボーン

④ よく出る用語

- ピッツィカート
- グリッサンド
- 弱音器（ミュート）
- クレッシェンド

⑤ 音の大きさの変化

pp → だんだん強く → 大きな盛り上がり

作曲家：モーリス・ラヴェル
フランスの作曲家
管弦楽の魔術師

ラヴェル「ボレロ」の基本情報

「ボレロ」は、フランスの作曲家モーリス・ラヴェルが作曲したオーケストラ作品だよ。もともとはバレエ音楽として作られたけれど、今日ではバレエをとまなわずに、オーケストラだけで演奏されることも多いんだ。

曲名	ボレロ
作曲家	モーリス・ラヴェル ※フルネームではジョゼフ・モーリス・ラヴェルと表記されることもある
作曲された年	1928年
初演	1928年、パリ・オペラ座
作曲者の国	フランス



音楽的時代	近現代 ※印象派・印象主義と関連づけて扱われることも多い
拍子	4 分の 3 拍子
基本の調	ハ長調 ※終結部で一時的にホ長調へ転調し、その後ハ長調に戻る
演奏形態	オーケストラ
大きな特徴	同じリズムと 2 種類の旋律がくり返され、楽器を変えながらだんだん強くなっていく

「ボレロ」は、曲の仕組みがとてもシンプルなのに、聴いているとどんどん引きこまれる作品だよ。同じリズムと旋律をくり返しながら、楽器の音色と音量が変わっていくところに注目しよう。

作曲者ラヴェルについて



ラヴェルってどんな人？





プロフィール

- モーリス・ラヴェル
- フランスの作曲家
- 1875 年生まれ
- 『管弦楽の魔術師』
- 代表作：
『ボレロ』
『ダフニスとクロエ』
『水の戯れ』など

フランスの地図



パリ音楽院で学んだ

バスコ地方のシブールで生まれたよ

 美しい音色づくりが得意

 オーケストラの楽器の使い方が名人級



「ボレロ」を作曲したのは、フランスの作曲家モーリス・ラヴェルだよ。
フルネームでは、ジョゼフ・モーリス・ラヴェルと表記されることもあるんだ。





ラヴェルは、1875年にフランス南西部のバスク地方にあるシブールで生まれたよ。
幼いころ（6歳ごろ）からピアノを学び、14歳でパリ音楽院に入ったよ。その後、作曲家
ガブリエル・フォーレの作曲クラスで学んだんだ。

ラヴェルは、細やかで美しい響きを作ることがとても得意だった作曲家だよ。
特に、オーケストラの楽器をどのように組み合わせれば、どんな色合いの音になるのかを
考える力にすぐれていたんだ。

オーケストレーションとは

オーケストレーションとは、オーケストラで演奏するときに、どの楽器にどの旋律や伴奏
を担当させ、どのような音色の組み合わせを作るかを考えることだよ。
ピアノ曲などをオーケストラ用に編曲する場合にも使われる言葉なんだ。

ラヴェルは、管弦楽の響きを作るのがとても上手だったため、「管弦楽の魔術師」と呼ば
れることがあるよ。

ムソルグスキーのピアノ曲「展覧会の絵」をオーケストラ用に編曲したことで有名な
んだ。

ラヴェルの代表作には、「ボレロ」のほかに、バレエ音楽「ダフニスとクロエ」、ピアノ
曲「水の戯れ」、「亡き王女のためのパヴァーヌ」などがあるよ。

ラヴェルの音楽的時代

ラヴェルは、近現代の作曲家として扱われることが多いよ。

また、ドビュッシーとともに印象派、または印象主義の作曲家として紹介されることもあ
るんだ。

ただし、音楽の時代区分にはいろいろな考え方があるよ。

学校のテストでは、教科書や授業プリントでどのように説明されているかを優先して覚え
よう。



テストでは、「ラヴェル＝フランス」「近現代」「印象派」「管弦楽の魔術師」「展覧会の絵をオーケストラ編曲」のように、セットで出ることが多いよ。

「ボレロ」とはどんな曲？



『ボレロ』の仕組み



同じ材料が、少しずつ変化して大きく盛り上がる曲

スネアドラムの一定のリズム



最初から最後まで、ほぼ同じリズム



A・A・B・Bを基本にくり返す

旋律 A

→

旋律 A

→

旋律 B

→

旋律 B

→

...

A・A・B・Bを基本に何度もくり返す！

楽器が少しずつ変わる

※代表的な楽器を抜粋



→



→



→



→



→



→



フルート クラリネット ファゴット サクソフォーン トロンボーン 全合奏

同じ旋律でも、担当する楽器が変わる

音の大きさ

pp

(とても弱く)

だんだん強く

fff

(とても強く)

終わり近くで
ホ長調へ転調し、
ハ長調に戻る！

ポイント



- 同じリズム

旋律 A

旋律 B

- 旋律Aと旋律B



- 楽器が少しずつ増える・変わる



- だんだん大きくなる



- 最後に大きく盛り上がる！

「ボレロ」とは、もともと18世紀のスペインで生まれた3拍子系の舞曲のことだよ。ラヴェルの「ボレロ」も、4分の3拍子で書かれているんだ。ただし、伝統的な舞曲をそのまま再現したものではなく、ボレロのリズムをもとに独自の作品として作られているよ。

ラヴェルの「ボレロ」は、1928年にバレエ音楽として作曲され、同じ年にパリのオペラ座で初演されたよ。

「ボレロ」のあらすじ

初演時の「ボレロ」は、スペインの酒場を舞台にしたバレエだったよ。周囲の人々に促された一人の踊り手が長いテーブルの上で踊りはじめ、音楽が強くなるにつれて、踊りも少しずつ激しさを増していくんだ。



まわりの人々も次第に熱狂し、舞台の緊張と興奮はどんどん高まっていく。
最後は、大きな緊張と興奮の中で激しく終わるんだ。

つまり「ボレロ」は、一人の踊りから始まった熱気が、音楽とともに大きく高まっていく作品なんだね。

「ボレロ」のあらすじで覚えてたいキーワード

- スペインの酒場
- 一人の踊り子
- 長いテーブルの上で踊りはじめる
- だんだん高まる熱気
- 最後は大きな緊張と興奮の中で激しく終わる

「ボレロ」はなぜ有名なの？

「ボレロ」がとても有名なのは、曲のつくりがとても独特だからだよ。
ふつうの曲では、途中で新しいメロディーが出てきたり、テンポが変わったり、曲想が大きく変化したりすることが多いよね。

でも「ボレロ」は、ほとんど最後まで、同じリズムと2種類の旋律をくり返しているんだ。

それなのに退屈にならないのは、主題を演奏する楽器が次々に変わり、音色が少しずつ変化していくからなんだよ。

さらに、最初は pp（ピアノッシモ）というとても弱い音で始まり、曲の終わりに向かって、どんどん音が大きくなっていくよ。

このため「ボレロ」は、曲全体が一つの長大なクレッシェンドのように作られた作品として知られているんだ。

クレッシェンドとは

クレッシェンドとは、音をだんだん強くするという意味の音楽用語だよ。

「ボレロ」では、曲全体が大きなクレッシェンドのように作られているんだ。



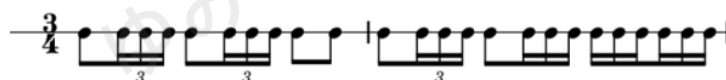
「ボレロ」のリズムと旋律 A・B

「ボレロ」を理解するうえで、とても大切なのが、くり返されるリズムと2種類の旋律 A・B だよ。

スネアドラムがくり返す「ボレロのリズム」

「ボレロ」では、スネアドラムから始まる同じリズム型が、ほぼ全曲を通してくり返されるよ。

曲が進むと、ほかの打楽器や複数のスネアドラムも加わりながら、このリズムが曲全体を支えていくんだ。



最後の2小節ではリズム型がくずれる

スネアドラムは、ほぼ全曲を通して同じリズム型をくり返すけれど、最後の2小節では、それまで続いてきたリズム型を離れ、オーケストラとともに曲を終結させるリズムへ変化するよ。

同じリズム型をくり返し続ける「ボレロ」の中で、反復の規則がくずれる例外的な場面なんだ。

スネアドラムは、日本語では小太鼓と呼ばれることもあるよ。

「ボレロ」では、このスネアドラムのリズムが、まるで踊りの足音や、少しずつ高まる鼓動のように、曲全体を支えているんだ。

「ボレロ」では、スネアドラムから始まる同じリズム型が、ほぼ全曲を通してくり返されるよ。ただし、最後の2小節ではリズム型を離れ、曲を終わらせる演奏へ変化することも覚えておこう！



旋律 A と旋律 B

「ボレロ」では、主題となる旋律が2種類あるよ。

この記事では、テストでよく使われる表し方に合わせて、旋律 A と旋律 B と呼ぶね。

旋律 A

旋律 A は、比較的わかりやすく、すっきりした印象の旋律だよ。

はじめにフルートがこの旋律を演奏するところは、テストでもよく出るポイントなんだ。



旋律 B

旋律 B は、旋律 A よりも少し不思議な響きに感じられるかもしれないね。

楽譜を見ると、旋律 B には、ハ長調の音階には含まれない音を示す臨時記号が多く使われていることがわかるよ。

そのため、旋律 A とは違った独特の色合いに聞こえるんだ。



旋律 A と旋律 B の見分け方

- ・ 旋律 A：比較的すっきりした印象
- ・ 旋律 B：臨時記号が多く、少し独特な響きがある
- ・ 楽譜問題では、旋律 B にフラットなどの臨時記号が多いことに注目しよう

旋律はどのようにくり返される？

「ボレロ」では、旋律 A と旋律 B が、次のようにくり返されるよ。

A → A → B → B → A → A → B → B → A → A → B → B → A → A → B → B → A → B

つまり、A が 2 回、B が 2 回ずつ提示される形を基本に、2 種類の旋律が何度もくり返されるんだ。

主題となる旋律は、A と B を合わせて全部で 18 回提示されるよ。A と B はそれぞれ 9 回ずつ登場し、最後は A・B の順に 1 回ずつ提示されるんだ。

ここで大切なのは、「メロディーそのものがどんどん変わる曲」ではなく、同じ旋律を、楽器や音色を変えながらくり返す曲だということなんだ。

「ボレロ」で使われる楽器

それぞれの役割を覚えよう！



『ボレロ』で活躍する楽器

ラヴェルの『ボレロ』を彩る、印象的な楽器たちを紹介します！



打楽器	木管楽器	木管楽器	鍵盤楽器	金管楽器	木管楽器
スネアドラム	フルート	サクソフォーン	チェレスタ	トロンボーン	クラリネット・ファゴット
					
同じリズムを、ほぼ最初から最後までささむ	最初に主題を演奏する楽器	オーケストラでは少し珍しい木管楽器	きらきらした音の鍵盤楽器	力強く、滑らかな音の動きが印象的	それぞれ主題を独奏し、異なる音色を聴かせる
役割 曲の土台となるリズムを支える	役割 メロディーのはじまりを美しく演奏する	役割 やわらかく、色彩感のある音を加える	役割 きらめきや神秘的な雰囲気をつくる	役割 力強く、うねるような効果を生み出す	役割 クラリネットは明るく、ファゴットは低く個性豊かな音色
まとめ 『ボレロ』は、同じリズムと2つの旋律をくり返しながらか、楽器が少しずつ増えて、だんだんと大きくなっていきます。それぞれの楽器の役割を知ると、より深く音楽を味わうことができます！					



「ボレロ」は、オーケストラで演奏される曲だよ。
ただし、ただ大勢の楽器がいっせいに鳴るだけではなく、最初は少ない楽器から始まり、少しずつ楽器が増えていくところが特徴なんだ。

同じ旋律でも、楽器が変わると、まるで違う色に聞こえるよね。
ラヴェルは、その「音色の変化」をととても巧みに使っているんだ。

主題を担当する楽器と音色の組み合わせ（1～11回目）

「ボレロ」では、主題を演奏する楽器が少しずつ変わっていくよ。前半では主題が主に1つの楽器から次の楽器へ受け渡され、途中から複数の楽器の組み合わせが使われるんだ。後半になると、弦楽器やほぼ全オーケストラへと広がっていくよ。
細かい順番まで毎回テストに出るとは限らないけれど、最初のフルートや、珍しい楽器であるサクソフォーン、チェレスタ、オーボエ・ダモーレなどは確認しておこう。

回数・旋律	主題を担当する楽器・音色の組み合わせ	ポイント
1回目（A）	フルート	最初に主題を演奏する楽器。頻出
2回目（A）	クラリネット	シングルリードの木管楽器
3回目（B）	ファゴット	長い管が二つ折りになっている木管楽器
4回目（B）	小クラリネット	クラリネットの仲間
5回目（A）	オーボエ・ダモーレ	オーボエよりやわらかい音色
6回目（A）	フルート＋弱音器を付けたトランペット	2つの楽器を重ね、独特の音色を作る
7回目（B）	テナーサクソフォーン	オーケストラでは比較的珍しい楽器
8回目（B）	ソプラニーノ・サクソフォーン ※演奏ではソプラノサクソフォーンが使われる場合もある	サクソフォーンの仲間



回数・旋律	主題を担当する楽器・音色の組み合わせ	ポイント
9 回目 (A)	ホルン+2 本のピッコロ+チェレスタ	ホルンの主旋律に、2 本のピッコロとチェレスタの音を重ねる
10 回目 (A)	オーボエ・ダモーレ+複数のクラリネット+コーラングレ	複数の木管楽器を重ねた音色
11 回目 (B)	トロンボーン	独奏の動きと音色が特徴的

12 回目以降は、複数の木管楽器や弦楽器などが加わり、主題を演奏する編成がしだいに大きくなっていくよ。最後には、ほぼオーケストラ全体による力強い響きへと広がるんだ。

最初のフルート、スネアドラム、サクソフォーン、チェレスタ、トロンボーンあたりは特にテストに出やすいよ。

スネアドラム



スネアドラムは、小太鼓とも呼ばれる打楽器だよ。

「ボレロ」では、ほぼ最初から最後までリズムをきざみ続ける、とても重要な楽器なんだ。

フルートとピッコロ

フルートは、「ボレロ」で最初に主題を演奏する楽器だよ。

金属製に見えるため金管楽器と間違えやすいけれど、分類は木管楽器なんだ。



ピッコロはフルートの仲間で、フルートよりも小さく、1オクターブ高い音が出るよ。
「ピッコロ」はイタリア語で「小さい」という意味なんだ。

クラリネット・オーボエ・ファゴット

クラリネット、オーボエ、ファゴットは、どれも木管楽器だよ。
木管楽器か金管楽器かは、あとで詳しく説明するけれど、楽器の材料だけではなく、音を出すしくみで分類されるんだ。



ファゴットは、長い管が二つ折りにされているのが特徴だよ。
見た目の特徴も、楽器名を答える問題で出やすいので確認しておこう。



オーボエ・ダモーレは、オーボエの仲間の木管楽器だよ。
「オーボエダモーレ」と、中黒を入れずに表記されることもあるんだ。

名前に使われている amore（アモーレ）は、イタリア語で「愛」という意味だよ。
そのため、オーボエ・ダモーレは「愛のオーボエ」という意味の名前なんだ。



オーボエとの違い

オーボエ・ダモーレは、ふつうのオーボエよりも管が少し長く、オーボエよりも低い音が出るよ。

オーボエがハ調の楽器であるのに対して、オーボエ・ダモーレはイ調の移調楽器なんだ。
楽譜に書かれた音よりも、実際には短3度低い音が鳴るよ。

オーボエ・ダモーレの特徴

- オーボエの仲間の木管楽器
- 2枚のリードを使うダブルリードの楽器
- オーボエよりも管が少し長い
- オーボエよりも低く、やわらかい音が出る
- 先端のベルが、丸みのある卵形になっている
- イ調の移調楽器



音色の特徴

オーボエ・ダモーレの音色は、オーボエに似ているけれど、オーボエよりも少し低く、やわらかく落ち着いた響きをもっているよ。

オーボエの明るくはっきりした音に比べると、オーボエ・ダモーレは、あたたかく、少しくすんだような音色に感じられることもあるんだ。

「ボレロ」ではどのように使われる？

「ボレロ」では、オーボエ・ダモーレが主題を担当する場面があるよ。
主題がさまざまな楽器へ受け渡されていく中で、オーボエ・ダモーレのやわらかく独特な音色が加わることで、それまでとは違った音の色合いが生まれるんだ。

後の主題では、オーボエ・ダモーレがクラリネットの仲間やコーラングレなどと重なり、複数の木管楽器を組み合わせた複雑な音色も作られるよ。

オーボエ・ダモーレは、オーボエより少し低く、やわらかい音が出る木管楽器なんだね！

サクソフォン



サクソフォンは金属でできているけれど、リードを使って音を出すため、分類としては木管楽器だよ。



「ボレロ」では、サクソフォーンのように、オーケストラでは比較的珍しい楽器が使われていることも特徴なんだ。

楽器名は、サクソフォーン、サクソフォン、サックスなどと表記されることがあるよ。文字数指定がある問題では、指定に合わせて答えよう。

チェレスタ



チェレスタは、見た目は小さなピアノのような鍵盤楽器だよ。でも、ピアノのように弦をハンマーでたたくのではなく、金属音板をハンマーでたたいて音を出すんだ。

そのため、きらきらした、少し幻想的な音色がするよ。

「ボレロ」では、ピッコロやホルンなどと組み合わせさせて、独特の音色を作っているんだ。

弱音器を付けたトランペット

「ボレロ」では、弱音器を付けたトランペットも使われるよ。

「弱音トランペット」と呼ばれることもあるけれど、特別な種類のトランペットではなく、ふつうのトランペットのベルに弱音器を取り付けて演奏しているんだ。





弱音器とは

弱音器は、楽器に取り付けて、音量や音色を変えるための器具だよ。
カタカナではミュートともいうんだ。

トランペットでは、音が出るベルの部分に弱音器を取り付けるよ。
弱音器を付けると、音がただ小さくなるだけではなく、明るく華やかなトランペットの音色が、少しおさえられた、細く遠くに聞こえるような音色へ変化するんだ。

弱音器を付ける目的

- 音量をおさえる
- 音色を変化させる
- ほかの楽器と重ねたときに、新しい音色を作る

「ボレロ」ではフルートと一緒に演奏する

「ボレロ」では、主題がさまざまな楽器へ受け渡されていくよ。
主題の6回目では、弱音器を付けたトランペットとフルートと一緒に主題を演奏するんだ。

トランペットだけで演奏すると、明るく力強い音が目立つよね。
そこで弱音器を付けて音色をやわらげ、フルートの音と重ねることで、どちらか一方の楽器だけでは作れない、少し不思議で独特な音色を生み出しているんだ。

これは、異なる楽器の音色を組み合わせる新しい響きを作る、ラヴェルのすぐれたオーケストレーションがよく分かる部分だよ。

弱音器は、音を小さくするだけではなく、音色を変えるためにも使われるんだね！



トロンボーン



トロンボーンは、スライドと呼ばれる伸縮する管を動かして音の高さを変える金管楽器だよ。

この仕組みによって、音の高さを連続的に変えるグリッサンドを表現しやすいんだ。ただし、「ボレロ」のトロンボーン独奏全体がグリッサンドで演奏されるわけではないよ。

木管楽器と金管楽器はどうやって分けるの？

木管楽器と金管楽器は、楽器が木でできているか、金属でできているかだけで分けられているわけではないよ。

基本的には、どのようなしくみで音を出すかによって分類されるんだ。

木管楽器と金管楽器の大きな違い

- 木管楽器：息を吹き込み、空気の流れやリードの振動によって音を出す
- 金管楽器：マウスピースに当てた唇を振動させて音を出す木管楽器の音の出し方

木管楽器の音の出し方

木管楽器には、音を出すしくみがいくつかあるよ。

- フルート・ピッコロ：吹き口の縁に息を当て、空気の流れを振動させて音を出す
- クラリネット・サクソフォーン：1枚のリードを振動させて音を出す
- オーボエ、オーボエ・ダモーレ、コーラングレ、ファゴット：2枚のリードを重ねたダブルリードを振動させて音を出す

リードとは、息を吹き込むと振動して音を生み出す薄い板のことだよ。



リードとは

リードとは、管楽器のマウスピースなどにつけて、息を吹き込んだときに振動して音を出す薄い板のことだよ。

葦（あし）やダンチクなどの植物を素材にして作られることが多いんだ。

クラリネットやサクソフォーンは、1枚のリードを使うシングルリードの楽器だよ。

オーボエやファゴットは、2枚のリードを重ねたダブルリードの楽器なんだ。

金管楽器の音の出し方

金管楽器は、奏者がマウスピースに唇を当て、息を吹き込みながら唇そのものを振動させて音を出すよ。

トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバなどは、すべてこのしくみで音を出すため、金管楽器に分類されるんだ。

トランペットやホルンは、バルブを押して管の長さを変えることで音の高さを調節するよ。

トロンボーンは、スライドを動かして管の長さを変え、音の高さを調節するんだ。

金属でできていても木管楽器になる

ここで間違いやすいのが、フルートとサクソフォーンだよ。

現在のフルートやサクソフォーンは、金属で作られているものが多いよね。

けれど、どちらも唇を振動させて音を出す金管楽器ではないため、木管楽器に分類されるんだ。

- フルート：吹き口の縁に息を当てて音を出すため、木管楽器
- サクソフォーン：リードを振動させて音を出すため、木管楽器
- トランペット：唇を振動させて音を出すため、金管楽器
- トロンボーン：唇を振動させて音を出すため、金管楽器



楽器が金属でできているからといって、必ず金管楽器になるわけではないよ。「何でできているか」よりも、「どのように音を出すか」に注目しよう！

終結部で加わる打楽器

「ボレロ」で最も目立つ打楽器は、ほぼ全曲を通して同じリズム型をくり返すスネアドラムだよ。

けれど、使われている打楽器はスネアドラムだけではないんだ。

曲がクライマックスに近づくと、ティンパニ、バスドラム、シンバル、タムタムなども加わり、オーケストラ全体の響きをさらに大きく、力強くしていくよ。

タムタムとは

タムタムは、大きな金属製の円盤を、やわらかいばちで打って音を出す打楽器だよ。中国を起源とする銅鑼の仲間で、英語では tam-tam と表記されるんだ。



見た目はゴングとよく似ているけれど、オーケストラでは、決まった音の高さをもたない大きな金属製打楽器を、タムタムと呼ぶことが多いよ。

タムタムの音の特徴

- 低く重い響きがする
- 音を打ったあとも余韻が長く残る
- 決まった音の高さを感じにくい
- 緊張感や迫力、衝撃を強めることができる



「ボレロ」では、タムタムは曲の終わり近くで加わるよ。

それまで少しずつ大きくなってきた音楽に、低く広がる重い響きを重ねることで、クライマックスの迫力と緊張感をいっそう強めているんだ。

スネアドラムが曲全体のリズムを支える役割をもつのに対して、タムタムは終結部の衝撃と迫力を強める役割をもつと考えると、違いが分かりやすいよ。

スネアドラムは曲を通してリズムを支え、タムタムは終わり近くで加わって、クライマックスの迫力を強めるんだね！

テストで出やすい奏法・音楽用語

ピッツィカート

ピッツィカートとは、弦楽器の弦を弓ではなく、指でつまんではいいて音を出す奏法のことだよ。

ピッツィカート (pizzicato)

※弦楽器の奏法のひとつ



「ボレロ」では、冒頭から弦楽器による伴奏としてピッツィカートが使われているよ。音を短く、リズムよく響かせることができる奏法なんだ。

表記として「ピチカート」「ピツィカート」と書かれることもあるけれど、この記事ではピッツィカートに統一するね。テストでは、授業プリントの表記に合わせると安心だよ。



グリッサンド

グリッサンドとは、一音一音をはっきり区切らず、音の高さをなめらかにすべらせるように上下させる奏法のことだよ。

「ボレロ」のトロンボーン独奏には、音をなめらかにつなぐグリッサンド的な動きが含まれているよ。

ただし、独奏全体を一続きのグリッサンドとして演奏するわけではなく、楽譜に書かれた音を演奏しながら、部分的になめらかな動きを生かしているんだ。

弱音器（ミュート）

弱音器とは、楽器の音量や音色を変えるために取りつける器具のことだよ。カタカナではミュートともいうんだ。

「ボレロ」では、主題の6回目に、弱音器を付けたトランペットとフルートが重なって演奏し、独特の音色を作るよ。

なお、練習のために音量をおさえる「消音器」と、演奏表現のために音量や音色を変える弱音器は、目的が少し違うので注意しよう。

転調

転調とは、曲の途中で調が変わることだよ。

「ボレロ」は基本的にはハ長調で進むけれど、終結部で突然ホ長調に転調し、その状態が8小節続いたあと、再びハ長調に戻って終わるんだ。



『ボレロ』の転調はここ！

最後の旋律Bが
終わったあと、
この小節線の直後から
転調が始まる

最後の旋律Bが終わったあと、
ここから**コーダ**に入り、
ホ長調へ転調

ホ長調の部分は
約8小節続き、
その後**ハ長調**に戻って
終結する

← 最後の旋律B → コーダ (ホ長調) →



最後の旋律Bが終わると、ここから**コーダ**に入り、**ホ長調**へ転調する。
ホ長調の部分は**約8小節**続いたのち、**ハ長調**に戻って終結するのがこの曲の構成です。

ずっと同じリズムと旋律がくり返されてきたところで、終わり近くに急に調が変わるため、強いインパクトが生まれるよ。

『ボレロ』で広がる音楽豆知識

しくみがわかると、音楽がもっとおもしろい！

ミュート (弱音器)

音を小さくしたり、
音色を変えたりする道具



ミュート (弱音器)

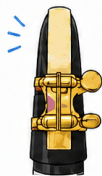


ミュート装着時

『ボレロ』では
弱音器つきトランペットが登場

リード

ふるえて音を出す、うすい板



クラリネット・
サクソフォーンは
1枚
(シングルリード)



オーボエ・
ファゴットは
2枚
(ダブルリード)

チェレスタ

きらきらした音がする鍵盤楽器



鍵盤 → ハンマー → 金属音板
金属の音板をたたいて音を出します

「ボレロ」重要語句のまとめ

語句・項目	意味・ポイント
作曲者	モーリス・ラヴェル。フランスの作曲家
出生地	フランス南西部、バスク地方のシブール
音楽的時代	近現代。印象派・印象主義と関連づけて扱われることも多い
異名	優れた管弦楽法から「管弦楽の魔術師」と呼ばれることがある
代表作	「ボレロ」「ダフニスとクロエ」「水の戯れ」「亡き王女のためのパヴァーヌ」など
オーケストラ編曲	ムソルグスキー「展覧会の絵」の編曲で知られる
ボレロ	もともとは18世紀スペインで生まれた3拍子系の舞曲
拍子	4分の3拍子
基本の調	ハ長調。終結部で一時的にホ長調へ転調し、その後ハ長調に戻る
初演	1928年、パリ・オペラ座
演奏形態	オーケストラ
スネアドラム	この楽器から始まる同じリズム型が、ほぼ全曲を通してくり返される
旋律 A・B	2種類の主題。旋律 B は臨時記号が多い
pp	ピアノッシモ。とても弱く
クレッシェンド	だんだん強く
ピッツィカート	弦楽器の弦を指ではじいて音を出す奏法
グリッサンド	音の高さをなめらかにすべらせる奏法。トロンボーンで出題されやすい



語句・項目	意味・ポイント
弱音器	ミュートともいう。音量や音色を変える器具
チェレスタ	金属音板をハンマーでたたいて音を出す鍵盤楽器
サクソフォーン	金属製だが、リードで音を出すため木管楽器に分類される

「ボレロ」テスト対策ポイント

- ・ 作曲者はモーリス・ラヴェル
- ・ ラヴェルはフランスの作曲家で、近現代・印象派と関連づけて扱われる
- ・ ラヴェルは、優れた管弦楽法から「管弦楽の魔術師」と呼ばれることがある
- ・ 「ボレロ」は 1928 年にバレエ音楽として作曲された
- ・ 4 分の 3 拍子、基本はハ長調
- ・ 終結部で一時的にホ長調へ転調し、その後ハ長調に戻って終わる
- ・ スネアドラムから始まる同じリズム型が、ほぼ全曲を通してくり返される
- ・ 2 種類の旋律 A・B がくり返される
- ・ 最初に主題を演奏する楽器はフルート
- ・ 旋律 B は臨時記号が多く使われている
- ・ pp から始まり、曲全体が長いクレッシェンドのようにだんだん強くなる
- ・ ピッツィカート、グリッサンド、弱音器、チェレスタ、サクソフォーンの特徴を確認しよう

